

月刊文化財 昭和48年1月号(二二二号)

## 多摩ニュータウンの先住者

—主として縄文時代のセトルメント・システムについて—

小林達雄

# 多摩ニュータウンの先住者

— 主として縄文時代のセトルメント・システムについて —

小林 達 雄

(一)

昭和三十九年、多摩ニュータウン計画が定められた時、そこは約一、五〇〇戸、五、〇〇〇人が居住する農村であった。やがて計画の一部完成につれて、四十六年三月から四十七年十二月までの七次にわたる入居が進み、現在では八、五〇七戸、約二五、〇〇〇人が移住してきた。先住者はたちまち六分の一以下の少数派に転落するとともに、これまでのニュータウン区域におけるセトルメント・システムの主役から脇役へと回されはじめている。過去、この地を舞台として行動を展開してきた先住者の遺跡もまた、まさにこういったパターンの繰り返しであることを示している。ところで果たして鉄筋コンクリートのニュータウンだけが、その因果を避けうるものかどうか、はなはだ興味あるところである。

(二)

多摩ニュータウンは、関東西部山地から多摩川の右岸沿いに細長く広がったいわゆる多摩丘陵のほぼ中央辺から北寄りにかけて位置し、東西一四キロ、南北二四キロ、面積約三、〇〇〇ヘクタール（約九〇〇万坪）に及ぶ。行政上は、多摩市を大きくとり込み、周辺部に稲城・町田・八王子の三市を含む。本区域の東方面は多摩川と三沢川、西縁は境川の各沖積地に接し、北は多摩川の支流大栗川右岸で

ほぼ限られる。南に偏しては、主要な尾根が東西に走り、分水界をなす。分水界の北側斜面は比較的急峻な地勢を呈しているが、南側はふところの深い小谷が開析し、それに沿って馬の背状の丘陵が細長く張り出して大栗川と乞田川の沖積地へのぞむ。換言すれば、ニュータウン区域はその周囲を沖積地および分水界によって限られ、またその内部に乞田川と大栗川の樹枝状の開析谷と低い丘陵群を擁するという地理的に限定的なまとまりを呈しているのである。このことは、これから触れようとする縄文時代などの遺跡が、ある程度の自己完結性を帯びた有意の地理的環境のなかで把握しようという重要な前提を与えてくれている。

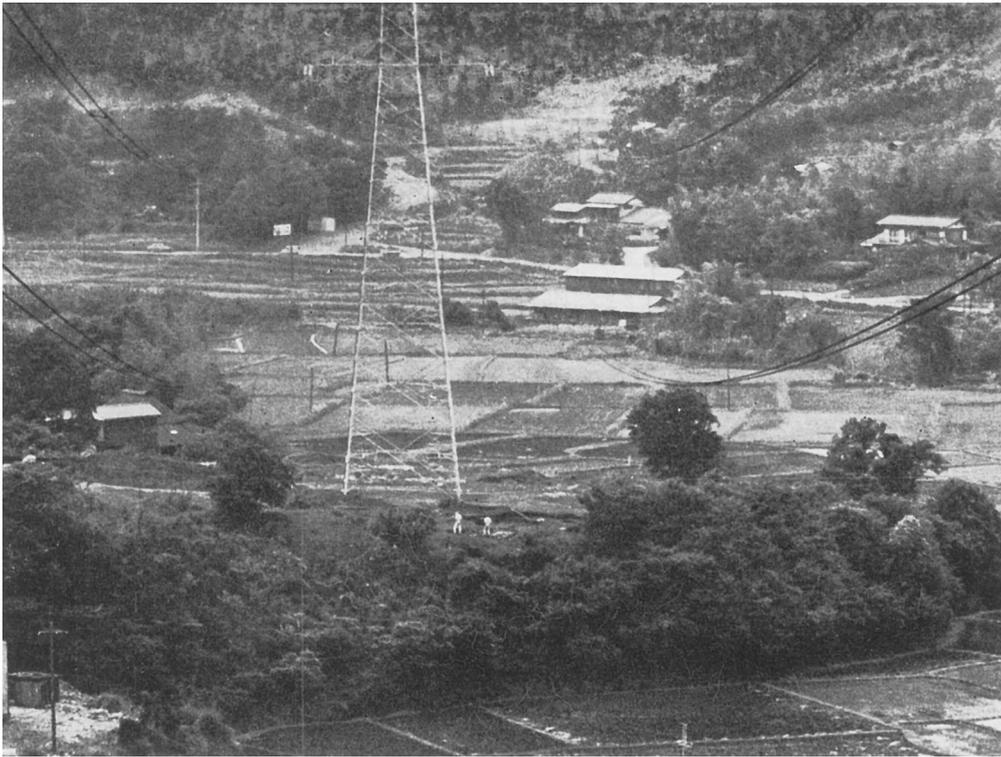
この環境は、当時にあつては、単に住居を営むに必要な空間というにとどまらず、それらの住居建築に必要な材料の供給源でもあつたし、さらになによりも食糧としての植物・動物をはじめとするあらゆる活動のためのエネルギーを内蔵する大倉庫であつたのである。一方、遺跡は、環境からのエネルギーの摂取活動およびそこから確保されたエネルギーを背景として展開されたもろもろの活動の結果として遺されたものであり、それらの活動によって、遺跡はいろいろな八かたちVをとるのである。それゆえ、遺跡は単なる空間的なひろがり以上の意味をもつこととなり、遺された遺物・遺構、そしてそれら相互の関連性をも内包する総

体として認識されるのである。ここに、実体としての遺跡から区別し、理念上の概念として、遺跡の八かたちVを八セトルメントVと定義することができる。

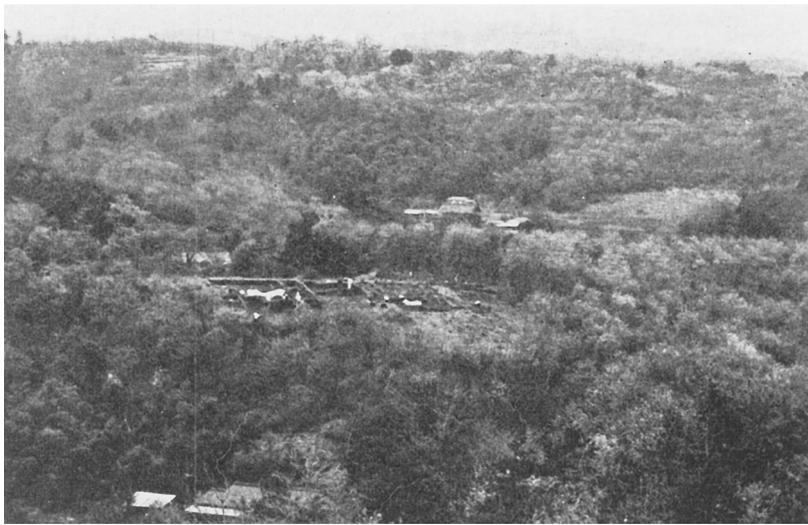
各々の遺跡は、立地やその占める面積をはじめとして、さらに遺物・遺構などの面にわたって詳細にみればみるほどに千差万別であるが、一方そのなかには、ある程度の共通の内容によって抽象することのできるグループが存在することも明らかである。いわば遺跡のタイプロジーである。このような観点から、縄文時代の遺跡を見渡すと、大略次のような六つのパターンの存することがわかる。

**A** 広い平坦面を有する台地上に立地し、多数の住居跡および貯蔵穴などのピット群、墓墳群などがある。遺跡の中心に広場がある。土器・石器など各種の遺物が豊富である。とくに土偶・石棒などその時代のいわゆる特殊遺物がしばしば認められる。またかなり遠隔の地域から搬入された土器などをもつ。なお、土器型式にして二〜三型式またはそれ以上にわたる継続的な定住地となっている場合が多い（写真1）。

**B** 馬の背状の舌状台地先端部などに立地し、数棟から十数棟に及ぶ住居跡がある。貯蔵穴などのピット、墓墳など住居跡以外の遺構は少ない。広場としての平坦な場所は狭い。土器・石器など遺物は多いが、いわゆるその時代の特殊遺物の類はまれである。存続期間は、一土器型



1 セトルメント・パターンA 多摩ニュータウンNo57遺跡 (縄文中期)



2 セトルメント・パターンB 多摩ニュータウン No139 遺跡 (縄文中期)

|   |  |   |                           |
|---|--|---|---------------------------|
| 遺物・遺構の空間的ひろがり<br>実体としての場<br>遺跡<br>遺跡のあり方を限定するもの | 行動または行動の複合<br>遺跡のあり方を限定するもの<br>セトルメント<br>共通性によって抽象化されたセトルメント | 個別の行動または行動の複合体の様式<br>セトルメント・パターン<br>セトルメント・システム | 文化・社会構造<br>セトルメント・システムの総和 |
| 実体  |  | 理念  |                           |
|   |  | 上の概   |                           |
|   |  | 念   |                           |

式期間のみで完結している場合が多く、その先後の型式が認められる場合でもきわめて断片的である(写真2)。

**C** 斜面裾部または丘陵頂部付近などの狭い平坦面に立地し、一〜二棟の住居跡がある。他の遺構はほとんどない。遺物はそれほど多くない(写真3)。

**D** かなり急勾配の斜面地などにも立地し、住居跡のないのが特徴である。ほかの遺構もほとんどないが、まれに正体不明のピットなどをもつ場合がある。土器はせいぜい数個体を限度とし、石器の発見はまれである。また炉跡や焼土なども確認されない。これは火を焚かなかつたということではないが、その痕跡を遺す程度の継続的な使用がなかったことを意味するものと考えられる(写真4)。

**E** その他A〜Dのセトルメントから離れて独立的に存在する墓地、デポ、土器製作用粘土の採掘跡、石器原材の採掘跡、石器製造跡などがある。

**F** その他、遺物・遺構などの実体として、確認しえないが、一晩だけのキャンプ地とか、道・狩猟・採集の場などを想定しうる。

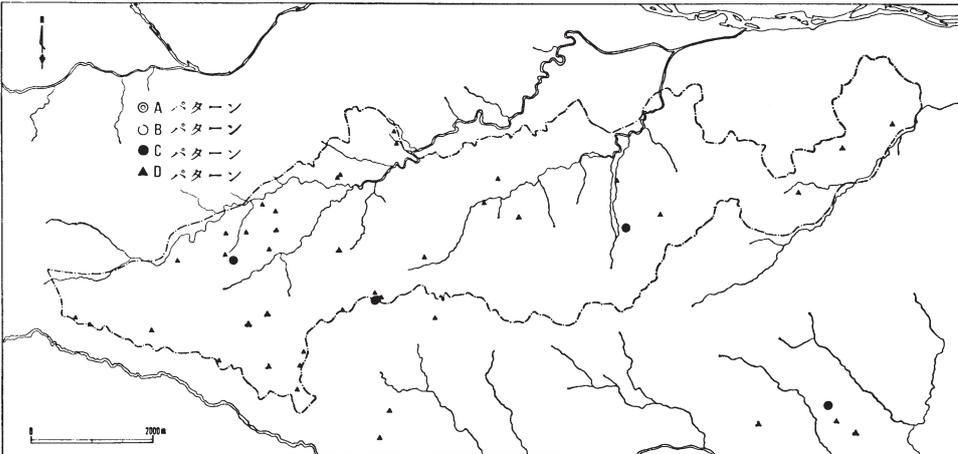
さて、これらのパターンのうち、Fはあらゆる集団の行動のなかに付随するものであるが、潜在的であり、具体的に実体として把握することは困難である。また、Eはある特定の時代や地域にのみ認められたりするものである。一方、A〜Dは、いわば縄文時代におけるセトルメ

多摩ニュータウン区域を中心とする遺跡の分布図(1)  
および縄文各期におけるセトルメント・パターンの分布図(2~6)

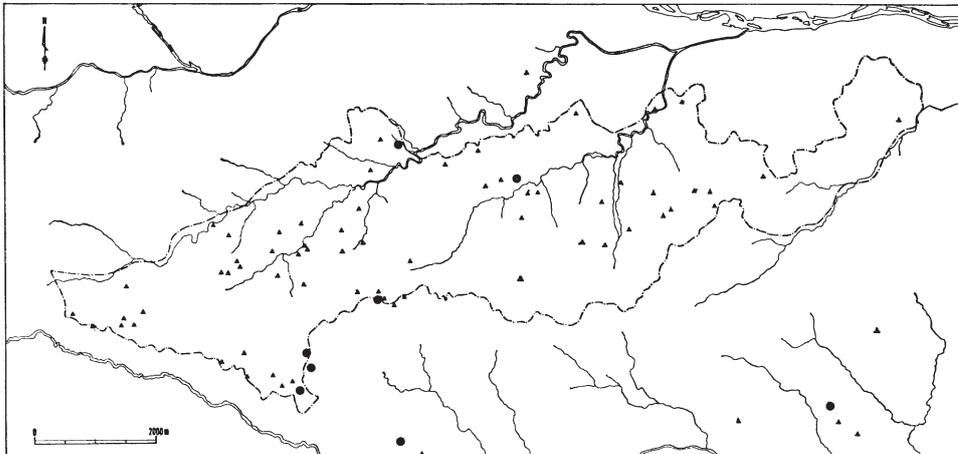
1 多摩ニュータウン区域を中心とする遺跡の分布



2 早期前半



3 早期後半



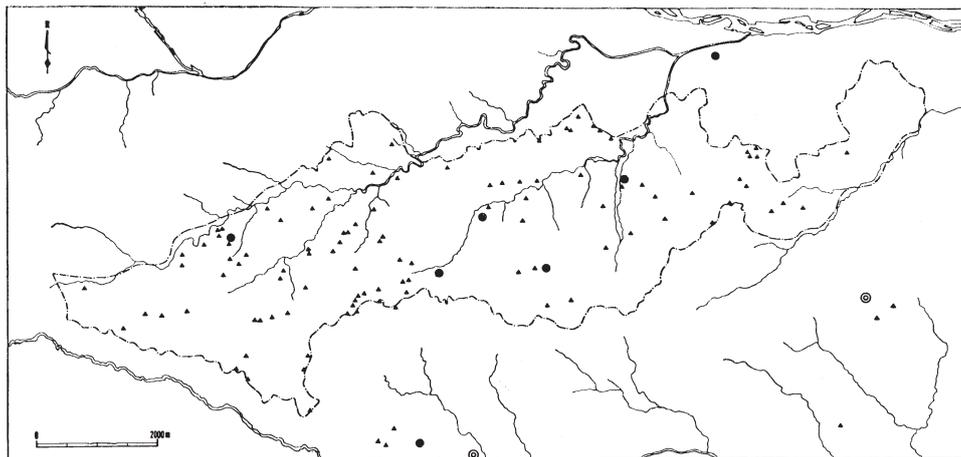
ントの柱ともいべきもので、きわめて普遍的である。それらは、集団の全構成員が居住し共同祭式などが行なわれる場とか、あるいは狩猟・採集の前進基地とか、季節的な仕事場とか、日常生活・生業一般にかかわるいろいろな行動の内容に由来するものとみられる。

遺跡が、この因果律によって認識されるにいたり、はじめてA~Fの△セトルメント・パターンは、当時における行動パターンの具象的な反映として理解されるのである。さらに、一定の地域内におけるセトルメント・パターンの組み合わせ形態は、単なるセトルメント・パターンの集合ではなく、そこに占拠する集団の狩猟・採集活動をはじめとした社会全般に対応する構造体として理解されねばならない。換言すれば、その遺跡群の個々のセトルメントは、大地に密接にかかわり合うとともに、相互に有機的に関係するシステムの一環として、各々の機能を分担するのである。かくて、この△セトルメント・システムをして、集団の行動様式から社会構造までも反映する概念にまで止揚することができる。

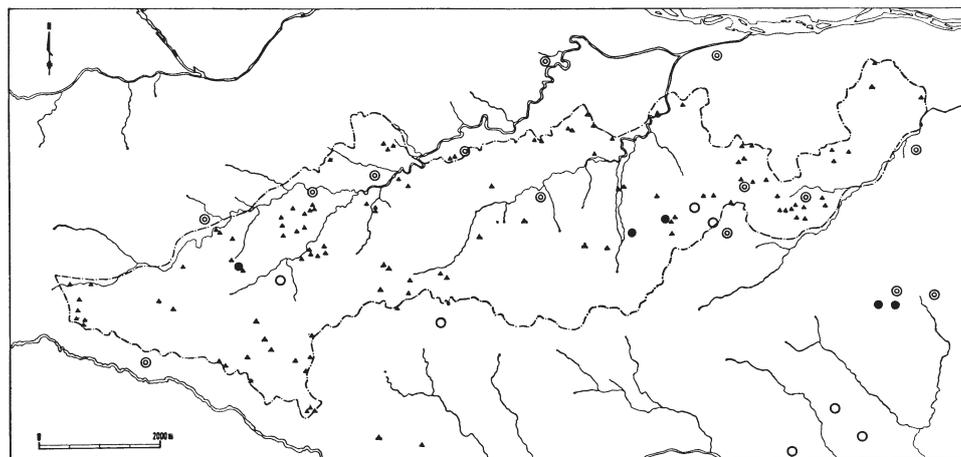
(前ページ付表参照)

したがって、多摩ニュータウン区域内の遺跡の検討にあたり、各々のパターンの関係のあり方すなわち各時期におけるセトルメント・システムの普遍性と特殊性を把握することによって、そこを占拠し、生活の舞台とした集団の時代性や地

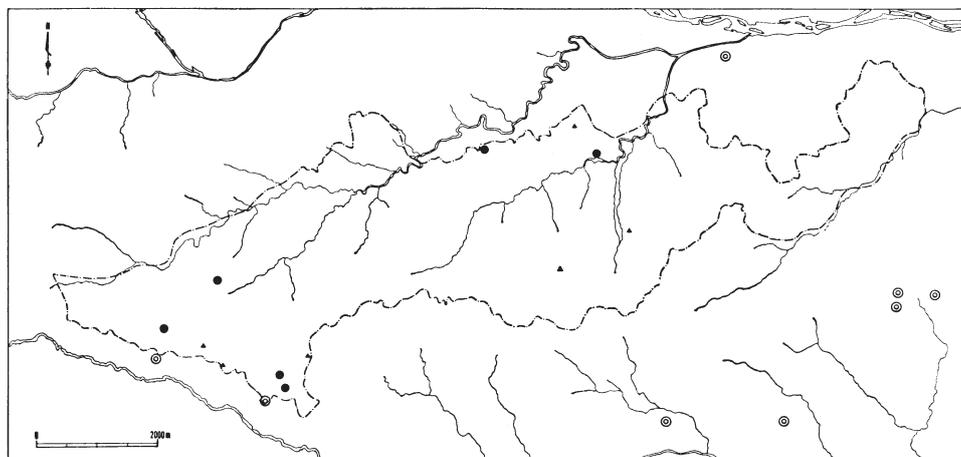
4 前期後半



5 期中中葉



6 後期前半



(作図 可児通宏・安孫子昭二・小田静夫)

域性を、より具体的に理解することができると思われる。

(三)

ニュータウン区域内に所在する遺跡については、多摩ニュータウン遺跡調査会によって、実に五一二か所が確認されており、そのうち約一五〇か所が発掘されている(分布図1)。これらの成果をもとにして、遺跡のあり方を通観すると、縄文時代全般の流れのなかで、発生から消滅にいたるいわばひとまとまりずつ区別されるポジティブな動きがいくつか認められる。それは縄文時代早期前半、早期後半、前期前半、前期後半、期中中葉、後期初頭などであり、一方では、これらの動きの先後にあって、空白でほとんど変化のないネガティブな動きが介在する場合が少なくないが、このこともまた歴史的事実として重視すべきものといわねばならない。すなわち縄文時代の流れは、このポジティブな動きとネガティブな動きが交互に織りなして複雑な様相をとるといのが実態なのである。以下、遺跡のあり方から、各々の動きについて時代順にみてゆこう。

I 先土器時代

縄文時代に先立って、先土器時代の遺跡をみれば、ナイフ形石器が盛行する時期に属する遺跡のみがわずかに四か所確認されているにすぎない。しかも、いずれも遺物は断片的で、縄文時代のパター



3 セトルメント・パターンC 多摩ニュータウンNo52遺跡

(縄文早期)



4 セトルメント・パターンD 多摩ニュータウンNo214遺跡

(縄文前期)

ンに徴すればDパターンに類するとみられるものである。一方、ニュータウン区域の南西に広がる相模原台地や多摩川をへだてた武蔵野台地においては、先石器時代の各時期にわたって遺跡が存するばかりでなく、Cパターンなども少なくないという状況と比較すると、対照的である。このような彼我の差が、一体どこから出てくるのか、明確には説明できないが、ただそれらの彼地において河岸段丘が良く発達しているという事実は留意されよう。あるいは、そのような地理的環境に関係する部分があるかもしれない。

## II 縄文時代草創期

先石器時代の終末期から、さらに縄文時代にはいつての草創期全般を通じ、ほとんど遺跡は発見されていない。これらの長期間、無住に近い状態としかいようがないのであろうか。もっとも、この時期は、関東地方はおろか、全国的にも遺跡は数えるほどしかわかっていないのであり、それらのいずれもが山岳地帯寄りに偏在するという情勢のなかでは、むしろ一般的なあり方として理解すべきなのかもしれない。ただこの時期の所産と考えられる有舌尖頭器一点が単独に発

見されているDパターンの遺跡があり、これとかわりを有するほかのセトルメントが、一体どの辺りにあるのかという点が興味あるところである。相模野台地で発見されている有舌尖頭器を出土する遺跡等との関係など、今後の問題としておきたい。

## III 縄文時代早期(分布図2・3)

〔早期前半〕 関東地方一円に、忽然といわゆる擦糸文系土器が出現し、あちらこちらに多数の足跡を印している。この情勢は、多摩丘陵においても例外ではなく、ニュータウン区域内に三九か所の遺

跡が発見されている。その内訳は、Cパターン三、Dパターン三六か所、AとBのパターンはない。この時期に用いられた土器は、砲弾形を呈する深鉢で、器面全体を縄文で飾る種類(「J型」と擦糸文で飾る種類(「Y型」)で代表されるが、とくに本地域においては、縄文と擦糸文が一定の規格に則って併用する独特な種類(JY型)を保有している点が注目される。しかも、このJY型を普遍的に保有する遺跡のひろがり、先述のごとき地理的に限定性を示す本区域内のみ認められるのであり、まさにここを舞台として活動を展開していた集団の領域が具体的・限定的に把握しようという重要な可能性を物語っている。この広さは約三、〇〇〇ヘクタール強で、少数のCパターンと多数のDパターンとの組み合わせ(一対一二)によって特徴づけられていることがわかる。なお、Cパターンの三遺跡をはじめ、多くのDパターンが谷頭付近または尾根に近いところに位置して、川の合流点からへだたっていることもまた特徴の一つとして指摘できる。

〔早期中葉〕 早期前半の擦糸文系土器の時期においては、遺跡の密度からいっても、一大中心地を呈していたにもかかわらず、すでにその擦糸文系土器の最終段階ごろから遺跡は激減しはじめ、それ以降押型文系土器・貝殻沈線文系土器様式など約五土器階程期間(土器様式の時間的な変遷過程において区別される五段

階にわたる期間)を通じて、Dパターンが数か所あるにすぎない。隣接の周辺地域にも少ない。この空白期は、先行の早期前半と、次に続く早期後半のポジティブな動きとの間に介在して、きわめて対照的である。

〔早期後半〕 粘土に植物性繊維を混和して土器を作り、器面を貝殻の背でこすって付けた条痕文で飾る新しい様式が出現し、再び遺跡が増加する。その数六八、Cパターン五、Dパターン六三、C対Dの比率は約一対一二で、早期前半と同じ構造をとる。やはりA・Bのパターンはない。また、Cパターンの立地が尾根周辺部にやや偏している。遺跡の立地や各パターンの組み合わせ形態など、早期前半と共通した局面が目立ち、いわば本地域における早期的なセトルメント・システムとしての安定した姿をうかがうことができる。

#### IV 縄文時代前期(分布図4)

前期にはいると、条痕文系土器様式は西方に後退し、代わってバラエティーに豊かな縄文で器面を飾る多縄文繊維土器様式が一般化する。この交替劇を境にして、本地域から遺跡が全く影をひそめる。この空白期は、花積下層式から関山式古に至るわずかに二土器階程期間にとどまるが、周辺地域をも含めてやはり一大事件といわねばならない。

〔前期前半〕 しかし、やがて関山式新の段階になると、ぼつぼつ遺跡が現われ

はじめ、次の黒浜式期にいたる約二土器階程期間に含まれる遺跡は、六一か所を数える。Cパターン一三、Dパターン四八、CとDの比率は一对三強を示し早期における一对一二というあり方とはがらりと違っている。なお、この時期には、すでに他の地域でBパターン、Aパターンなどが出現しているにもかかわらず、本地域においては依然としてA・Bパターンを欠く構造にあり、その特殊性が理解される。

〔前期後半〕 土器の胎土に植物性繊維を混入するという特殊な手法は、前期の中頃を境にして消滅し、新しい様式が成立するのである。この新様式がはじまった最初の階程(諸磯a式期)では、二〜三か所の遺跡しか知られていないが、続く第二・第三階程の時期(諸磯b式新・旧)を中心にして一〇七か所も発見されている。これは、ニュータウン区域内の遺跡のうちでは、五か所に一か所の勘定となるほどに、予想外な集中度を示している。Cパターン五、Dパターン一〇二、CとDの比率は一对二〇強で、前期前半の一对三強とはいちじるしい差異がみられる。このことから前期における前半と後半には、単なる土器様式の交替という事象を超えた意味のひそんでいることが予測されねばならないであろう。なお、これだけ多くの遺跡がありながら、それがC・Dパターンにとどまり、いぜんとしてA・Bパターンが見当たらない

のは、興味ある事実である。ただ、本区域の南を走る分水界の南側には、AとBのパターンが二か所あるけれども、それと本区域内に所在する多くのC・Dパターンとの関係は不明である。あるいは、両者ともども同一のセトルメント・システム内に包括されるのかもしれないし、そうでないのかもしれない。

前期の最終段階にさしかかると、遺跡は急激に減少して、ほとんど見当たらなくなってしまう。この情勢は、少なくとも関東地方全域に共通する普遍性の一環として把握されることとなる。

#### V 縄文時代中期(分布図5)

すでに前期の終末期にはじまった空白状態は、中期にはいつてからも続き、約三土器階程期間(五領ヶ台、勝坂I・II式)を通じて、数か所のDパターンを見るにすぎない。ところが、中頃から後半にかけての四土器階程期間、いわゆる勝坂III・加曾利E I・II・III式などに遺跡は急増し、そのニュータウン区域にとってはじめてのA・B両パターンが出現する。このA・B・C・Dパターンの構造からなるセトルメント・システムは、この時期に全国各地で普遍化しており、いわばそこに中期的な世界の確立をみることできるのである。

この期の遺跡総数は一二三。内訳はA六、B三、C三、D一一となる。ここでは、Dパターンの占める割合がさらに大きくなり、B・Cのパターン各一に對

して三七とふくれあがる。一方、最も規模が大きく、いわば集団の中核的な集落とも目されるAパターンは、B・C各パターンの二倍となり、セトルメント・システムのなかできわめて重要な位置を占めていることがわかる。また、これらのAパターンの分布を見ると、本地域内にある広い平坦面を有するすべての地点をあますところなく占領しており、大栗川・三沢川流域に沿って四―二キロ間隔に並ぶ結果となっている。このことに関連して、樋口昇一氏の研究によれば、長野県松本平のAパターンがほぼ四キロ間隔で存在するという事実が指摘されており、その対照は興味あるところである。今後、彼我におけるAパターンの内容の比較をはじめとし、B・C・D各パターンとの組み合わせ形態などの分析から、セトルメント・システムの差異の把握を具体的に期待しうるであろう。

#### VI 縄文時代後期(分布図6)

〔後期前半〕 中期中葉に全域を文字通り席捲した中期的セトルメント・システムは、徐々にその遺跡を減少せしめ、後期にはいると初期の三土器階程期間(称名寺式・堀之内I・II式など)を通じて一三か所発見されているにすぎない。内訳はB一、CとD各六となり、これまでに見てきたセトルメント・システムにおいては、Cの数が圧倒的に占めるのに比べると、きわめて特異な様相を呈している。また本区域内唯一のBパターンが分水界

の南側に位置して境川をのぞむが、これと接して、本区域外ではあるが、環状積石遺構を伴う後期中葉以降に属する大遺跡Aパターンの存在は、注目されよう。

また、周辺地域をも含めて、後期以降のセトルメント・システムは、概してA・Bパターンに統合される傾向を示していることは重要である。

〔後期中葉～晩期終末〕 すなわち縄文時代の終わりまで、ニュータウン区域には全く遺跡は見当たらなくなる。この長期にわたる無人状態の継続については、周辺地域のあり方の検討とともに、その意味を追求してゆかねばならない。

#### Ⅶ 弥生時代から奈良・平安時代まで

〔弥生時代〕 この期にはいつてからも、縄文後期・晩期以来の空白期間はそのまま続き、多摩川の中・上流地域全体を見渡したところで、遺跡はまれである。

〔古墳時代〕 この期もやがて後半に入ると、多摩川と大栗川の合流地点付近の沖積地を背景として、稲荷塚古墳などの築造がなされ、さらに横穴古墳群へとうけ継がれてゆくことが知られる。また、当時の遺跡のあり方は、縄文時代のセトルメントに徴すればAパターンと見なされる集落跡が数か所出現しており、ここにはじめて農民の安定した定着をみるこ

とができるのである。

〔奈良・平安時代〕 この時代にはいると、ニュータウン区域は、他の周辺地域を凌駕するほどの活発な生活舞台として

クローズアップされ、約二〇〇か所の遺跡を数えるにいたる。このことは、多摩川をわずかに隔てて対岸に位置する武蔵国府との密接なかわり合いのなかで理解されることとなる。また、ニュータウン区域の中央部をよぎる旧鎌倉街道は、武蔵国分寺から府中を経て到達し、そのまま相模国へと通ずる幹線となっているが、これは「いざ鎌倉」という土壇場になって急にでき上がったものではなく、先述のごとき奈良・平安時代における多数の遺構の存在の基盤上に形成されてきたものといわねばならない。

なお、奈良・平安時代のセトルメント・システムにおいて、古墳時代に存在した類Aパターンが全く姿を消していることは重要である。八王子市中田遺跡および船田遺跡に代表されるがごとき多数の住居が広い平坦面にひしめいて存在するというその形態は、日常の労働が主として共同作業によっているという事情とも関係しているのであって、共同作業の仕量の減少が、類Aパターンを解体に至らしめたのではないかと解釈も可能かもしれない。すなわち、奈良・平安時代には、古墳時代までの共同作業によって耕地の開墾およびある程度の灌漑工事に目鼻がつき、家族単位の労働によって一定の規模の農業を維持できるレベルに達したという面があるのではないかと考えられるのである。それが、谷戸に沿って一〇二軒ずつ家の立ち並ぶ情景を呈す

ることとなったのであろう。なお、当時のセトルメント・システムにあっては、ふいごの口や鉄滓を出土する野鍛冶の跡、瓦窯跡、火葬墓、寺跡、古瓦や瓦塔の出土など特殊な機能を示すセトルメントを複雑に内包し、新時代の社会・経済機構を如実に反映するにいたる。

#### (四)

以上、多摩ニュータウン計画区域内における縄文時代のセトルメント・システムを中心に粗い素描を試みたが、これらほとくに多摩ニュータウン遺跡調査会による畑の一枚一枚をなめ回すような丹念な分布調査の成果に負うものである。

従来、分布調査といえば、地表観察によって単に遺跡の有無を確かめることであり、ほとんどそれ以上の期待をかけられることがなかったかのようである。しかし、莫大な時日と労力が要求される分布調査を単なる遺跡の有無調べの域にとどめておくわけにはいかないし、実際のところ地表からの観察によって、遺跡の性格をかなり明確に把握しうる部分のあることを積極的に悟らねばならない。換言すれば、遺跡は発掘によってのみ、その属性を明らかにしうるというものではないのである。

遺跡は、特定の機能を意識した青写真によって、具体的に大地に設計されたセトルメントである。そして縄文時代におけるA～Fのセトルメント・パターンは、

いわばその設計図の種類ともいうべきものであって、各々のパターンの設計図には特定の立地条件がイメージされていたものと理解される。したがって裏を返せば、遺跡の立地条件を分析することによっても、いかなる種類のセトルメントの遺跡であるかを把握しうる期待がでてくるのである。

一定規模の集団は、そのエネルギー獲得源として特定領域を占拠し、行動を展開する。縄文早期前半において、ほぼ多摩ニュータウン区域をテリトリーとする集団の存在を指摘し得たことはきわめて興味あることといわねばならない。そして、その集団は、Cパターン一に対し、Dパターン一二の形態をとり、約三、〇〇〇ヘクタール(約九〇〇万坪)のひろがりのなかに三九か所のセトルメントを遺しているのである。このセトルメント・システムは、いわば彼らのテリトリーのスペース・デザインともいえるが、同時代の山岳地帯や海浜地帯におけるスペース・デザインの具体的な比較を進めることによって、ニュータウン区域に占拠した集団の個性の把握へと接近しうるはずである。そして、このような方法を縄文時代全般にわたって、各地方ごとに推し進めてゆけば、当時の社会・文化について、もっと具体的なイメージを描くことができるにちがいない。

(こばやし たつお・文化庁  
文化財保護部・文部技官)